

「板兵子」こと伊藤兵三と同様、日夏歌之介の日記や随筆にしばしば登場するが誰だかわからなかった人に「畊雨子」と表記される人物がいる。

畊雨子が最初に登場する作品は昭和15年夏の水鶏くいなの宿滞在中、8月5日早朝5

時からの散歩の折、「新ノ川

で思ひがけなく畊雨子が友人と自転車で兎のエサの大

葉子を採るに会す」（「山荘日記」とある。その一ヶ月

後の9月5日には「畊雨子、堆朱家光悦翁、梨瓶子。雅

談」（同前）とあり、新聞記者奥村梨瓶を交えての交流

が窺える。他の記述には畊雨子に「旧友」という肩書

きをつけているので、その前年14年4月、10年ぶりに

帰郷した折「素通りしよう

とした飯田の駅に、明治二十九年に一緒に小学校に入

学した同級生の斑白禿頭が、八人も迎えてくれたのがま

たなくうれしかった。駅前

の宿で旧友と一しきり談つて」（「堆朱翁の家」とある、

黄眠先生が行く

本づくりの相談相手

嶋 不濁

7

日夏の凱旋を迎えてくれた同級生の中に「畊雨子」もいたに相違ない。

それは昭和20年の疎開の折も同様で、6月22日午後

2時過ぎ飯田駅に着き、梨瓶子の口利きで落ち着いた

蕉梧堂に泊まり、すぐに訪ねたのは旧友畊雨子と板兵

子であった（「栗里亭記」）。

その後、柏心寺の樋口家

の墓に詣で、10日程飯田の町の知友を訪ねて後、7月

9日、山本の石曾根竹村家へ向かうのである。日夏は

竹村家の番小屋（「栗里亭」と命名）で3ヶ月程過ごし、

冬越しの炬燵を求めて10月14日中平の石田（金澤家・

凝花村舎と命名）の離れ「雪後庵」に引越す（「ほ

日「知久町の畊雨子と歌集

装幀について相談」（「栗里亭記」一）したり、9月22

日「知久町の畊雨子宅へ。主人不在だったが、鮎で昼

食をもらう」（「お城下日記」など、ごく気楽な間柄を推

測させる記述が多い。とともに、本づくりには異常な

程のこだわりと蘊蓄うんちくのある日夏の相談相手になれる、

知久町に住む旧友ということになる。

追手町小学池上幸治校長が探し出してくれた明治33

年3月27日「尋常科男児童卒業録」には105人の卒業

業者名簿が掲載されているが、前述の条件を満たす人

物となると限られてくる。

そんな折、「伊那」378

号の牧内雅博「敬巷碑」の一節「篆額稲吉畊雨」に行

き当たった。正しくは「敬恭碑」と読むが碑陰に稲吉

の姓が確認できた。旧樋口家と通りを挟んで斜向いに

家があった稲吉正利である。姪の稲吉郷子さんの記憶

によれば、稲吉家は稲吉旅館に続いて、当時は稲吉活

版所を営み、本人は書家としても知られていたという。

昭和21年9月に刊行され、11月1日に出版記念会が催

された『山居読書人』の記念写真でも、写真中央の日

夏の左隣に位置している。本を持っているのは日夏以外には彼だけだ。



碑陰の敬恭の愛宕

ととぎすを聴くの記」。終戦を挟んだ1年半の山本滞在の間、日夏は何度となく飯田の町に足を運び、その度に訪ねるのが畊雨子なのである。

畊雨子については、旧友である以外に、中央公論編集者だった松下童山子（英磨）を差し置いて、9月18